

# 農業本流の今後を念頭に農業の現状を語る

## 1. はじめに

農は文化であり生活の基本であるだけに、農の安心・安全、味、などの面で、皆さん関心が高い。一方、農の議論については、自然体験、農林体験、農業体験として結構な取り組みが各地でなされているにもかかわらず、一般の方を交えた討論が極めて少ないのが現状である。

これをどう見るのか。産業としての農業について、一般の方が問題として意識する事が少ないためか、関心のなさが目立つようにとれる。農業は趣味の次元であればとっつきやすく、職業となるとそうではないということなのかもしれない。

そんな状況のもとで、農の安全安心を如何に確保していくのか、大きな問題に我らは今直面している。

ここでは、主に米作に焦点を当て、農の実状を概観し、どこにどんな問題があるかを整理することにした。もちろん今後に向けての方向性をも織り交ぜて述べることにした。これをもって、農の問題を市民とともに解決するための糧としたい。

## 2. 市民の農への関心

人が集まれば、多様的でいい意見が必ず出るものである。農についてのある会合では、以下のような声が出た。「食の安全、ビオトープ、農によるコミュニティ再生、自分で栽培が一番、農がどうなる」などである。これらの声を少し理屈っぽく整理すると以下の三つのカテゴリーに分けられる。一つ目が生産から販売まで、二つ目が本来の農業とは、三つ目が安心安全。

以降は、このわけ方を念頭において議論を構成したい。

## 3. 米の消費

我々は、どのくらい米を食べているのであろうか。米の消費について、成人1人が1日3合（ご飯茶碗2杯で1合(180ミリットル、150g)）の米を1年間(333日)食べるとして、1000合。これが二俵半であり一石(180リットル、150kg)である。たが、今ではその半分の量だという。

確かに、食生活が米中心から多様に変わった。食事では、米よりもパンやうどんなどの麺が主になりつつあり、加えて穀物主食が副食中心へとかわってきている。いわれてみれば、朝はパン、昼はうどんやそばにハンバーガなど。夜だけは米食という、そんな日常である。

ところで、市民側の出費をみよう。安い米であれば、10kg3000円、昔のように1石を平らげれば4.5万円。最近は、米を食べなくなってきたから、2万円ほどか。これに合わせるがごとく、生産者米価下落し、今では1石2.5万円ほどという（後述）。

## 4. 農業政策の変遷

農家の現状、国の農政の変遷を見る。

### (1) 農業の現状、耕地面積と収入

耕地面積でいえば、大きい農家といえば1ha(100a, 1町)の農地であり、小さい農家は10-50a(1-5反)である。なお、1haの数値は戦後の農地改革で制定された地主の耕地面積である。

次に収益をみよう。生産者米価は下落していて、今まで一俵(0.4石)2~3万円が今では1万円ほどである。また、米の生産量は10アール(1反)当たり平均600kg（場所によっては500kg程）であり、米価にして8万円程度である。

耕地面積2反の農家では、米価収入は16万円である。耕地面積1町の農家でも80万円のオーダーである。これに、農薬や農業機械のリース料を支払えば、純益はおして知るべしである。

1町の耕地面積でも食ってはいけない時代が続いている。

### (2) 農業経営強化

日本の農業をもっと強力にするためにということで数々の政策が実行された。60年代前半には耕地整理（小さな水田を寄せ集め50aほどにして一枚の水田にし、しかも水田道路も直線）が行われ、10年代前半から、事業主体が共同化して営農組合と言う企業体に変わった。いまでは、大規模農業を目指して、かつてない程の効率化を図っている。

(3) しかしながらかんせん米離れが進む一方、外米が入ってきて、米余りはかつてないほど著しく、生産調整では対処することができなくなってきた。併せて、国は工業優先政策を進めしており、農業にも市場原理主義を当てはめようとしている。その暫定的な期間として農家救済として補助金支給があり、これで曲がりなりにもやってこられた。しかし、h27年度には、これが打ち切りとなり、（国は）辞めたい人は辞め、作りたい人は勝手にどんどん作り、市場経済で勝手に生き残ってくださいという。

(4) 農政の一般人への啓発が（あまり）なかった。一般人には農政がしっかりと説明されてはいなかつた。食管制度についても、なぜそれが必要なのかを説明を十分にせずに制度を廃止した。そのときは、消費者に安い米が食べられますと国は説明をし続けた。

その後、農作物の（輸出入）自由化や米の輸入についても、（国は）農家つぶしを念頭においてとにかく安く食せますとして説明していた。そして今度は（国は）TPPを利用して農業をいよいよつぶしにかかっている。

こうした姿勢は、補助金についてもいやらしく現れている。農業の補助金について、都会の方から「俺らも一生懸命働いているにもかかわらず補助金はもらっていない。なぜ農家がもらえるのか。」という声が湧き出るようにして、国は労働者と農業人の間で足を引っ張り合させ、農業つぶしを図っているのである。

## 5. 米について

### (1) 米作に適す日本

もともとは湿地帯にて生育する熱帯の植物である米は、湿地帯の作付け可能な上に、割合生育が早く、大量に生産できるとあって、(全国)各地で根付いた。しかも、品種改良によって、寒い地域にも作付けができるとあって、高温多湿の夏をもつ日本ではうってつけの穀物である。

ちなみに、米作に対して畑作は、乾燥した土地が必要である。しじゅう水のある土壌では畑作物が腐ってしまうからである。

## (2) 特定銘柄の生育

市場で売る銘柄はコシヒカリやサニシキと呼ばれる銘柄である。味が良く、穂に実をたわわにするとあって、商品価値が高い。

これは、品種改良あっての成果である。一度、これらの銘柄が全国を席巻すると、今度は雑種の排除に余念がない。すなわち、水田では特定銘柄一種類のみを育て、雑種が入らないように、純種をまもって商品価値を保持しているという。

我らは稻なら特定銘柄しか育たないと思うくらい単純に生育を考えているが、農業人は上流にある水田から下流に向かう流れに乗ってくる雑種をもチェックするという。

## 6. 農薬と除草剤

今の農業で問題は、農薬と肥料にありといえる。

### A. 農薬

昔は雑草を機械的に土内部に押し込んでいたが、この作業を省くために、除草剤散布にかわってきた。その後、食の安全の立場から農薬を必要以上に使用していることが大いに問題となつた(今でも問題である)。これまで、作物に含まれる残留農薬が米ぬかになって、精米のときに除去できるとされていた。もちろん、精製した後にも残ることはいうまでもない。要は依然として危険な状態にある。そうであっても、収穫量を増やすためにやっていることである。

以前に、オイルショックのときだったろうか、諸物価高騰を受けて農協が農薬の産婦回数を減らす指導をしたところ、確かにウンカが増え、家のなかにも入ってきたが、それでも収穫量は以前と変わらなかったという。ということはこれまで必要以上に農薬を使っていたということである。

その後は、また散布回数を元に戻して、ウンカのいない田舎になってしまった。理由は、水田に草が生えるとその分だけ稻の収穫量が減り、味にも影響されるからという、あくまでも生産量確保のためである。

ちなみに、外国から輸入している農産物は、防腐のために農薬付けにしていることを述べておく。こんなことで、国民の安全をまもれるのか、無策に近い國の農政を憂うばかりである。

### B. 肥料

もともと、肥料は農作物にとって栄養補給の意味がある。作物を育していくと、土地がやせていくので、栄養分を補給するのであり、昔は人糞や堆肥をふんだんに供給していた。

時代が下り、手間隙をかけられない世の中になってくると、当然人工肥料が代役となって、いまは農作物について如何に成長を早めかつおいしさ(糖度)を向上させるかを念頭において

人工肥料万能時代に入っている。

さすが技術はすごい。そこでも手間隙かけない方法を考え、これまで人工肥料といえども、補給は成長に合わせて何段階にも分けていた。ところが今では、肥料はカプセル状になっていて、肥料散布を一回にして、第一段階に効くもの、第二段階に効くように、時期が来るとカプセルが溶け出すようになっている。まさに省力化に技術が貢献しているのである。

私に言わせれば、技術者や一部の農業人にそれで越にいって大丈夫ですかといいたい。とにかく、手間隙掛けない風潮がすすんでいる。いきつく先は、農作物の工場生産になるのではと。本来、農は大地のもと自然の恵みを一身に受けて、農業人と自然との交流にあるのに、技術者は分かっていないと思う次第である。

## 6. 本来、農業は手間隙掛けて

農業には、土と水があり、そこに太陽があり、そして毎日手間隙をかけて育てる姿勢が必要である。しかし、今の日本では専業農家は極めて少なく、後は兼業農家である。このため、農業は爺さんばあさんの仕事ということになる。よしんば若い方の出番となつても農作業は週末のみであり、やる気のある若い農業人でも「天気のいい日、何で一日中田んぼにいるのかって思いますし、早く家に帰りたいという気持ちもあります。」と語るくらいに苦悩が続いているのである。

## 7. 昔ながらは時代遅れなのか

昔ながらの米作として、二点、指摘したい。一点は、はさ掛け(田んぼで架構を組んで刈り取った稻を逆さにして天日で乾すこと)の米はおいしい。茎にある養分が米粒に集まるからである。今のコンバインで穂先を刈り取るのではおしさはいまいちである。

第二点は、乾燥も天日が一番。電気乾燥も遠赤外線を使ったりしているが、いわば米を痛めつけることには変わりはない。

とにかく、昔ながらの米がおいしいのは、手間隙かけるからといえる。それを人工でカバーする必要はない。とはいえ、大量生産するにはどうすべきか、問題は残る。そこに機械力や効率優先に頼らない自然を愛好する英知を期待したいものである。

## 8. 農家

農業では、作る人、加工する人、販売する人、と分業している。つくる人はどちらかといいうと職人気質であり、作ることが何よりも楽しんでいる。

そんな農の世界にもかかわらず、国からは農家は経営センスを持ち市場経済に参入せよ迫られている。他方、そんなことを横目に農の経済的なところにはプローカーが入ってきてている。作物を商品化して市場経済で売りさばき、利益を追求ということである。彼らは、それが農業のためというが、果たしてそうであろうか。市場経済の農業を落とし込めての利潤追求に農業の将来展望など語れる訳がないように思える。

## 9. 有機農業について

人工肥料、農薬、除草剤を一切使わない農業である。手間隙かけて育てることにより食の安全性を確保し、味を提供するので、すこぶる人気が高い。しかし、人工的大量生産に比べて収穫量は一般に半分程度しかなく、しかも一般の販路では小売りにはならない。そこで販路を開拓して、食の安心安全をもとに、消費者を募るのである。有機の皆さん、結構楽しくがんばっておられる。

ちなみに、穀倉地域でも、農家全体の1パーセント程度の方が有機農家である。

## 10. 自然農業について

自然農業は自然のままに栽培しようというものである。雑草も無理して除去しない。雑草と共存する米を作るのである。収穫量が落ちても自然の過程での生育であるから、自然の味が楽しめ、しかも安心安全である。

## 11. 消費者にとって

(1) 安心安全な作物について、自然農業や有機ならいざ知らず、安心安全を担保した食をとるならば、自分で作るのが一番である。農業人は家庭菜園でやられるのを奨めておられる。

都会でも、多くの農愛好家が郊外に家庭菜園を持って週末農業を楽しみ、収穫作物の味わっておられる。

(2) 消費者が作物を購入する場合、消費者は何を考えて購入するであろうか。まずは価格(安い)が前提であり、次に、一番が形、二番が味にこだわるという。ここでは、価格は別の機会にして、形について考える。

形については、形が悪ければ規格品外の扱いとなってしまう。売れないからである。例えばきゅうりが少し曲がっていて何が困るのであろうか、消費者教育の必要があるといえる。また、そんな雰囲気を作り出している社会常識を変えていくことも検討すべきであろう。

## 12. ほか

私は市民の方、農業人と議論している。いくつかの面白い話を紹介したい。

・病院では、食の安全を一番傷かっているように思うが、実際にはどのくらい関心をもってしているのであろうか、気になる。逆に言えば、偽ブランド米など偽証の製品が出回っていることが多いこの世の中、偽りにひつかからぬで欲しいということである。

・米が余っているのにもかかわらず、なぜ農家は米を作るのかって、いう人が多い。農家は、米を作り続けるしか生きる道が用意されていないのである。

・工業製品を売って農業作物を輸入に頼ればいいと言う方が依然多い。なぜ、自国の安心安全な食料を食すことを考えないのであろうか。

・TVドラマで限界集落株式会社があったが、ああいう話は身につまされたどこにでもある話である。ドラマ制作では、状況考査は当然されているとのことであるが、ディレクターが脚色

することもあり、所詮は、TVドラマということのようである。

・最近、農業の起死回生の一発として、観光農園と直販所をセットにして、テーマパークのような要素を取り入れている。結構、多くの方が来場している。例えば、石川県河北潟の大規模農地では、観光農園と直販所を設け、ひとつの農のあり方を実践している。

・農についての新しい取り組みは、大いにやるべきである。しかし、農に関する文化を守り育てることを忘れてはならない。得てして、新しい土地組は市場原理を受け入れて、農の根本を変えることにもつながるからである。

## 13. おわりに

農業について、これまでの農業が時代に対応しなくなっているといった政財界からの圧力により、本来の農業がかなり危機的状況にある。こうしたなかで、新しい農業の取り組みとして、農業体験の場や直販所、ネット販売、都会での直送販売などが実践されて、それなりに成果を上げている。しかしながら、これらは、どちらかといえば個人ベースのものであり、少し規模を大きくして営農組合レベルとしても観光と即売だけでは、本来の農業を支えるものではないことは言うまでもない。

そこで、農業に関する種々アイデアの実践といった次元ではなく、日本国全体の農業について抜本的な対応が必要であるとして、ここでは問題提起の意味を含めて農業の実状ならびに問題点を列挙して農業全体として解決の糸口を模索してみた。ここでの議論が今後の展開にむけて大きな糧になればとの思いである。

なお、本稿は多くの農業人との語りを自分流に構成し、私見をちりばめたものである。今後への展開も考えたい。

最後まで読んでいただきましてありがとうございました。

写真は自然農の米作風景

